巻頭言

苦難の一年でした。4月7日から5月25日までコロナウイルスにかかわる緊急事態宣言が出され、市内の小学校等も3月初頭から3ヶ月間休校となりました。本学の講義は、例年より遅れて5月7日から開始し、実験以外のほぼ全講義が年間を通してオンラインで行われました。前期は105分講義となりました。これらの準備と実施には、相当の時間を取られました。5月中旬には、角谷君と作成した無機化学実験ビデオも公開しました。視聴率は低いようでしたが、今後も講義等で活用する予定です。無機化学実験は合成実験の一部のみが対面で後期に行われました。オンライン試験では若干の問題も生じました。授業以外の各種行事、例えば3年次編入試験・大学院入試・成果報告会・卒研発表・修論最終試験などに関しても、その都度、実施方法について多くの議論があり、さまざまな変更が生じ、混乱の1年でした。

研究室では、4月第2週から6月中旬まで、研究室学生の来学が禁止されました。この間は教職員と博士後期学生のみが来学を許可され、学内は極めて静粛でした。研究室の連絡手段として、従来使ってきたサイボウズが非常に有用でした。来学禁止期間中、第一に、週2回はZOOMミーティングを開き、定常的にコンタクトできるよう配慮しました。第二に、熱測定や粘弾性測定などのオンラインウェビナーを随時活用しました。教材等の一覧も本冊子にあります。ポジティブアプローチの菅さんに、オンラインセミナーを実施いただきました。行動や考え方をポジティブに変えるためのヒントを多数いただき、感謝です。第三に、再開後にスムーズな研究展開ができるよう、卒修論およびパワーポイントも素案を提示してガイドしました。思えば、随分工夫も苦勞もしたものです。しかしながら、研究室運営では、人の問題が原因で様々な問題が生じ、対処に年度後半まで苦慮しました。以前退職された先生が、教員生活で最もつらかったことは何ですか、という最終講義での素朴な質問に「それは言えない」と答えていたのをいぶかしく思いましたが、それが何かによろやく思い至りました。教育機関では教員と学生の問題を切り分けることはできず、ここに根本的な難しさがあります。

今年度は、良いニュースも多数ありました。角谷君が学振特別研究員に採用されました。4月以降、申請書執筆と論文執筆を重ねたため、その甲斐あって、各種学会での受賞も連続しました。今後ますますの活躍が囑望されます。外場応答性ソフトマターの研究が大きく展開したことは喜びです。ニトロニトリト異性化の研究が連続論文にまとまったのも幸いでした。このほか、折に触れて卒業生が来訪、滞在してくれたのも大変嬉しいことです。私自身も大阪の堀越君の研究室を訪問しました。今年度は多数の学会がオンライン開催され、いくつかの学会で研究室学生も発表しました。私自身も企業向けのオンライン講演を経験しましたが、聴衆に思いがけず卒業生がいたのは嬉しい出来事でした。

(2021年3月30日 持田)